

## 原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和2年11月18日（水）
- 場所：原子力規制委員会庁舎 13階B・C・D会議室
- 対応：更田委員長

### <質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから11月18日の原子力規制委員会定例会見を始めます。

皆様からの質問お受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから、質問のほうをお願いいたします。

質問のある方は手を挙げてください。

では、フジオカさん。

○記者 NHKのフジオカです。

今日の定例会の議題には直接関係ないのですが、昨夜の九電の川内原発1号機が再稼働しまして、今後、発送電に入る見込みです。新規制基準の下で特重施設が完成して、再稼働した初のケースになると思うのですが、まず委員長の受け止めをお願いします。

○更田委員長 川内1号機特定重大事故等対処施設の工事中には、今年のたしか1月\*だったと思いますけど、工事中を見ているのですが、完成をして、運用を開始したということなので、国会会期中はちょっとなかなか難しいですけども、国会が明ければ、機会が整えば、是非見に行きたいと考えています。というのは、特定重大事故等対処施設、これは通常の運用時に顔を出す施設ではない、万一のときの備えのさらにそのバックアップ的な位置づけのものでありますから、日常使うものではないだけに、その運用についてふだんからどういった意識を持って取り組んでいるかといったところが重要になるだろうと思っています。

そういった意味では、マネジメントレベルだけではなくて、川内原子力発電所の現場でどういう意識を持って取り組まれているかというものに触れてみたいというふうに思っています。

○記者 分かりました。特重施設なのでありますが、設置までに一定の猶予期間はあったのですが、去年の規制委員会の判断で、期限を認めないとした経緯がございました。九電以外の事業者でも施設が完成するまではプラントが稼働できないという状態にもなったのですが、規制基準を厳格に運用した形としては理解しているのですが、改めて委員長、この辺りのお考えを伺ってもよろしいでしょうか。

※ 正しくは「2月」

○更田委員長 そうですね。この辺りの判断ってなかなか難しいところでもあるし、実際のところ。それに説明する、御理解を頂くという部分においても難しいところあるのだろうと思っています。

ただ、特定重大事故等対処施設については、新規制基準を策定のときから整備が議論をされてきたものであって、そして、東京電力福島第一原子力発電所事故の反省の中の大きなものを捉えるものとして構想されたもので、ある意味その福島第一原子力発電所事故の後に原子力というものが利用されるに当たって、大きな議論を経て整備が約束されたものです。そういった意味で、あのような事故を二度と起こさないという決意が国や規制当局だけのものではなくて、事業者自らがその決意を示したものをというふうにも受け止めていただきたいと思います。

そういった意味で、施工からの期間というのを本体施設の設工認、認可後というふうに行った改めた経緯もあって、その改めた経緯も踏まえて考えれば、ずるずるとその運用なしに稼働を許すというようなことはあってはならないというふうに判断したものです。

○記者 あと、1点、すみません。特重施設が完成したことで、事故対策の多重化が図られたと思うのですが、詳細不明ではあるのですが、より安全性は向上したと見られるのですが、その完成前と後でどれぐらいそのリスクというのは変わってきたものというふうに受け止めていらっしゃるのでしょうか。

○更田委員長 定量的なリスクという意味で、確率論的リスク評価が与えるものだとすると、CDFとよく言い方しますが、炉心損傷確率、恐らくほとんど数字として表れてこないと思います。

それから格納容器の損傷確率についても、その数値というのは極めて小さなものになると思います。というのは、そもそも新規制基準特定重大事故等対処施設を除く新規制基準が求めている重大事故等対策が十分に炉心損傷頻度や格納容器の破損頻度を抑え込んでいて、それが $10^{-6}$ 乗とか $7$ 乗といった数値が、それが $7$ か $8$ かの違いというのを評価としてきちり示すということは非常に難しくなります。

それから、いわゆる特重施設が出番となるような事象の頻度っていうのは、そもそも非常に小さいので、確率論的リスク評価が与えるリスクとして、定量的リスクとして特重施設の設置の効果というものを表すのは、これはなかなか難しいことです。

○司会 そのほかいかがでしょうか。

アマザワさん。

○記者 読売新聞のアマザワです。

今日の委員会の最後に出てきました福島第一原発というのは、緊急停止ボタンの誤操作について、今後も監視検討会のほうで引き続き追って、さらには、もしかしたら委員会でも、というようなお話がありましたが、今後はどのような点についてきちんと東電

に説明を求めていってという、加味してくような形を重きを置きますでしょうか。

- 更田委員長 まず東京電力は、福島第一原子力発電所の廃炉作業という極めて困難な作業に取り組んで、作業が困難でかつ非常に多様なものであるから、どうしてもこういうミスはやっぱりある程度は起きてしまうよなというミスと、それから、いや、幾ら何でもこれはないだろうと思いたくなるミスとがあって、今回のものは後者じゃないかと思われる節があるのですね。

今日、写真も委員会の資料に付いていましたけども、触れてしまって押した形にならないようにカバーも付いていて、緊急停止であるということが明記されているボタンが、なぜ押されてしまったのか。どういうところを聞いていくかというお尋ね何ですけど、そもそも何でこんなことが起きるのか、非常に不思議なので、まずはどうして起きたのか。協力会社の方の操作によるものだというんですけど、これは誰がとかその人かという問題ではなくて、どういう理解を持った人がその現場にいるべきかという、体制ができていたかであるとか、それから手順書にしても、書かれたものを誰がどうチェックしてきたというのは、同じ操作も、スクリーン上に現れるものを押せばいいという形だったらしいんですけど、それは直前の操作で、直前なのかな、以前の操作ではうまくいっているのですね。今回たまたまその非常用のボタンを押してしまっている。

ですので、これは作業に当たられた方々の理解や知識というものをうまく管理できていなかったのか、それとも手順書に何らかのミスがあったのを誰も気づかないで流れてきたのか。まずは事実関係を聞いてみないと、じゃあその手当をどうしようかというところまで、なかなか検討が進んでいかないように思います。

- 司会 そのほか、いかがでしょうか。ヤマガタさん。
- 記者 河北新報のヤマガタです。よろしくお願いします。

今日の議題とは直接関連がない上に、先週の質問とも若干ダブりがあってしまって恐縮なのですが、女川2号機の再稼働の関係で、本日は知事が経産大臣に直接地元同意をするということでの会談が行われます。これで一連の手続が終了するということになりますけれども、改めて御所感についてお伺いしたいのが1点と、先週の会見で、被災した原発だということもあり、運用に当たっては気を引き締めて慎重に当たってほしいということを東北電力に対して求めておられますけれども、この点について、規制委との関わりで見れば、今後、保安規定の審査というものが控えているかと思いますが、その際により注視したい点があればお伺いしたいということと、被災していない原発と比較したときに、何か保安規定で特段盛り込んだほうがよいものがあるのか、ないのか、現時点でのお考えをお伺いできればと思います。

- 更田委員長 まずは、間もなく東日本大震災そして東京電力福島第一原子力発電所事故から10年を迎えようとしている。言い換えると、東北電力は10年近くの間、原子力発電所の運用をしなかったわけですね。慎重にと申し上げて、実は審査の過程等で私自身が

受けている印象としては、東北電力というのは比較の上ですけれど、慎重な会社だと思っています。割と物事に関してじっくりと取り組む、飽くまで審査のプロセスで得た印象ですけれども、じっくりと取り組む会社だという印象を持っています。

ただ、一方で世代は変わっていて、私がまだ審査に参加していた頃からも、顔ぶれの上でももう変わってきていて、ですから、これは直接保安規定に結びつくものではないであろうとは思いますが、やはり東北電力に知識であるとか経験の伝承がきちんと進んでいるかどうか、進めようとしているかどうかといったようなところは聞きたいと思えますし、また被災した原子力発電所ではあるのですが、今申し上げたように、被災してからもう10年近くがたっていますので、もちろんかなりの数の方は残っておられるだろうけど、これから発電所を運用していく方々のうちの大きな部分が、伝え聞いたりあるいは文書で見たりという形で経験を、何と申しますか、直接経験することなくそこから学ばなきゃならない状態が生まれるわけですので、これは東北電力だけには限らないのですが、ただ、東京電力の場合は事故の当事者だった。そして、日本原電の場合はまだ稼働の手前というところに行っていない。そういった中で、東北電力が御地元の理解があって、これから保安規定等を経て再稼働に向かうのであるとすると、やはり被災したこと、そして1F事故のことをどう考えるかという意味では、ある意味、先頭バッターの部分がある。東京電力以外のBWR電力としての位置づけがありますので、そこは経営層から現場までよく議論をして、また意識を高めて、施設の運用に当たってほしいというふうに思います。

○記者 ありがとうございます。未経験の人が多いというところでの人材育成の部分であるとか、技術伝承のような部分をどう取り組んでいくのかというのをよくよく聞いてみたいというところですね。

○更田委員長 一つには、それは重要な点だというふうに思います。

○記者 分かりました。ありがとうございます。

○司会 そのほか、御質問いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

では、ヨシノさん。

○記者 テレビ朝日、ヨシノです。1点だけ。浜岡の審査が久しぶりに先週再開と申しますか、なりましたが、聞いていてとてもよく分からないことが、私たちみんな首傾げることが多々あったのですが、それは置いておいて、委員長は再開したこの今の原発、浜岡の審査の現状について、どのようにお考えか教えてください。

○更田委員長 現状というには余りにも序盤ではあると思います。やはり焦点は設計基準津波高さをはじめとした自然ハザードに関わる議論で、これもまだ序盤ですので、現状についてどう捉えると問われてもというのが実際のところですね。

○司会 そのほかはよろしいでしょうか。

それでは、本日の会見は以上としたいと思います。ありがとうございました。

—了—